わたしのフォトメモ —— ディテール編

早草睦恵 =文・写真
MUTSUE HAYAKUSA

光のレース模様

●ル・ランシーの教会 [＊1]

10年くらい前、パリから電車で数十分の郊外にオーギュスト・ペレ設計の「ル・ランシーの教会」を訪れた。その前に見たル・コルビュジエの「サヴォア邸」が、丁寧に修復されて、白く光り輝いていたのとは対照的に、近代建築史上、同様に貴重な建物であるにもかかわらず、その教会は悲しいくらい荒廃した状況におかれていた。

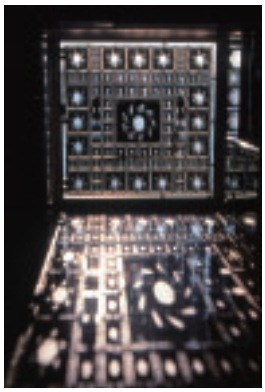
教会はコンクリートと色のついたガラスで構成されている。コンクリートは、汚れ黒ずみ、風化して周囲の自然素材で出来た建物に馴染んでいた。中に入ると一転して、コンクリートで精巧に縁取られた窓にはめ込まれたさまざまな色のガラスを通して、色をまとった光がレース模様を織りなし、空間全体を覆っていた。さまざまな色の光が、光線の具合で濃くなったり薄くなったりしながら、あたかも紙吹雪が舞うかのように飛び交う様は、まさに神（自然）の祝福を受けている気分だった。

コンクリートの柱、アーチ天井は、力の流れを無駄なくそぎ落としたスケールで建ち現れており、とても繊細である。鉄骨造のスケールに近い。材料の風化や汚れと相まって、コンクリートの物質としての存在感は限りなく薄くなっていて、ただただ乱舞する温かい光が際立っていた。

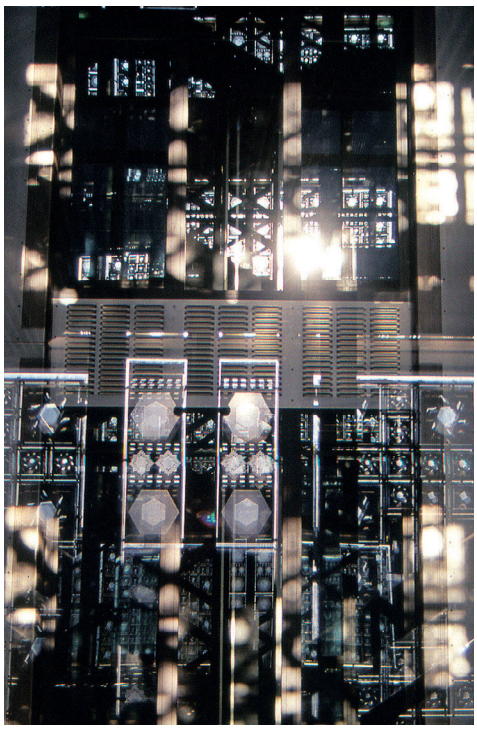
●アラブ世界研究所 [＊2]

パリのセーヌ川のほとりに建つジャン・ヌーベルの代表作のひとつ。パリに行った際には立ち寄る。建物内部は黒く、物質感を意図的に排除した空間に、ここでも砕かれたアラベスク模様の白くクールな光が乱舞していた。O.ペレの教会と大きく異なっている点は、ガラスや艶のある仕上げ材が内部に用いられている点。砕かれた光は、巧妙に配置されたガラスの壁や黒い反射面に映り、透過し、レース模様は増幅を繰り返している。内部の明るさは絶妙に計算されているのではないか。そのためガラスは半々の割合で反射と透過を担っている。実像と虚像の区別がつかない。J.ヌーベルの光の操作は、神業だと思う。✽

「ル・ランシーの教会」の床に映る光のレース模様



上——「アラブ世界研究所」の光のアラベスク模様
右——反射・透過により増殖する光の模様



[＊1] ノートル・ダム・デュ・ランシー教会（1923）オーギュスト・ペレ
[＊2] アラブ世界研究所（1987）ジャン・ヌーベル

はやくさ・むつえ——建築家／東京大学工学部建築学科卒業。1986～88年、岡設計。1988～91年、日本設計。1991年、セルスペース設立。現在、神奈川大学非常勤講師。
主な作品：那須野が原ハーモニーホール（1994）、元麻布の家（2002）、襲の家（2004）、万華鏡の家（2005）など。